

～マメ知識～ 「お盆はなぜ7月と8月があるのか～」



お盆を7月に迎える地域と8月に迎える地域があるのは存知の方も多いと思います。では、この違いはどのような理由から生まれてきたのでしょうか。

現在、私たちが使う暦はご存知の通り「新暦」です。新暦とは、つまり太陽暦のことで、太陽が地球を1周する日数(365日)を1年としています。明治5年(1872年)に採用されました。

それまでに使っていた暦を「旧暦」といい、太陽暦と太陰太陽暦を指します。日本の伝統的な行事は主に旧暦に基づいて作られました。

太陰とは「月」を指します。太陽暦は地球が太陽の周りを1周する周期を基に作られているのに対し、太陰暦は月の満ち欠けを基準に作られました。月は29日で地球を一周するので、29日、或いは30日で1カ月としていましたが、それでは12カ月で354日にしかならず、暦と季節がずれてしまいます。

太陰暦は現在、アラブ諸国などで使われていますが、これらの熱帯地域では、季節の移り変わりがあまりないので、問題がないでしょう。しかし、日本は季節ごとの特徴がはっきりしているので、暦が表す日が実際の季節と1カ月もずれてしまうこともあり、支障をきたしてしまいます。この不便さを解消するために、中国から太陰暦と太陽暦を組み合わせた太陰太陽暦を取り入れました。(604年)

それ以降、太陽暦を採用するまでに日本の暦が10回も変わったことを聞いて驚かれる方もいらっしゃるかもしれません。

明治5年太陽暦が採用されたことで、月日と季節感のずれはなくなりました。しかし、日本の多くの年中行事は既に旧暦を基に作られていましたので、新暦では季節が合わないものがありました。ひなまつりはその最たる例と言えるでしょう。現在の暦の3月3日では、自然のモモはまだ咲いていません。

お盆もその例の一つです。7月15日という日付に意味のあ

る行事ですが、新暦の7月15日は農繁期の真っ最中です。国民の大半を占めていた農民にとって、この7月15日にお盆を迎えるというのは、大変難しいことでした。強引に続けようとしたら、もしかしたら重陽の節句のように文化性が薄れるという現象も起こりえたかもしれません。

だからといって、旧暦の7月15日にあたる新暦の8月下旬から9月上旬ごろでは、日付が全くずれてしまいます。お盆は「7月15日」という日付に意味があるので、こちらの日程は問題がありました。そこで苦肉の策として7月15日から単純に1ヶ月後を「月遅れ盆」として行う地方が多くなったというわけです。但し、東京を中心とする大都市や、農繁期に重ならない東北地方などではそのまま7月15日に行っています。7月15日を「東京盆」と呼んだりするのは、そこに理由があるのです。

旧暦

新暦

【旧暦での年中行事の時期の新暦対照表】

正月	正月1日	2月中旬一下旬
人日	正月7日	2月下旬
上巳	3月3日	4月中旬一下旬
春の彼岸	春分	春分
端午	5月5日	6月下旬
七夕	7月7日	8月中旬頃(お盆の少し前)
お盆	7月15日	8月下旬—9月上旬
重陽	9月9日	10月中旬頃
秋の彼岸	秋分	秋分

(参考文献『暮らしの中の花(花の民族誌)』農文協)

2010年 大田市場花き部仲卸協同組合 青年部

